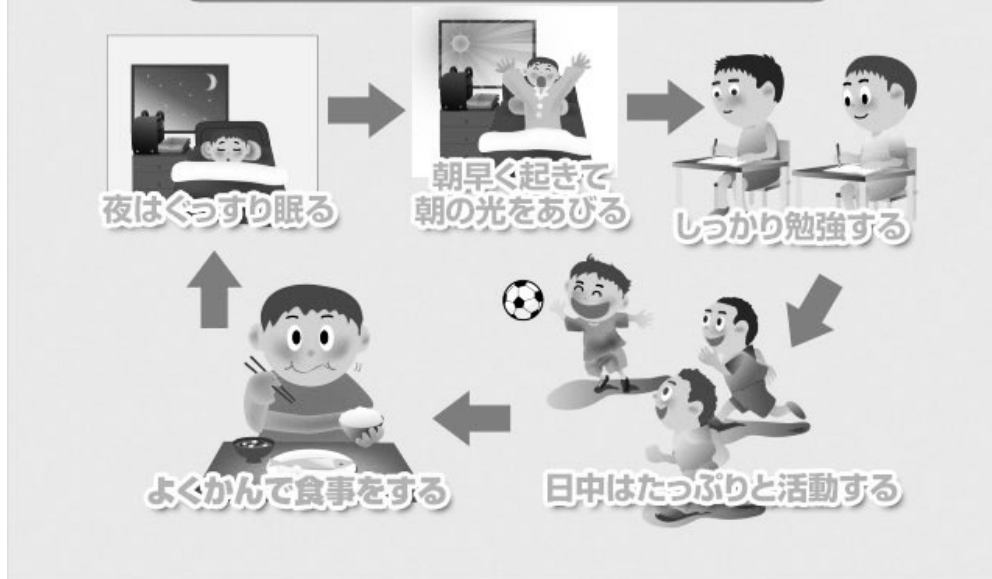


子ども本来の生活リズム



地域連携事業の意義

青少年アンビシャス運動推進本部 運動推進委員会委員長
横山 正幸

子どもの可能性は、年齢にともなって自然に現れてくるというものではありません。年齢や心身の状況に応じて体験すべきことを体験することによって、はじめて現実のものとなります。それは、ちょうどコンピュータにたとえることができるでしょう。コンピュータは、それがどんなに性能の良いものであったとしても最初に基本的な情報が入力されなくては何の意味ももちません。

子どもも同じです。頭脳という素晴らしいコンピュータをもって

生まれても情報が入らなければどうしようもないのです。では、子どもにとって情報とは何でしょうか。それは、「体験」です。五感をとおしての体験こそ、子どものその後の発達を方向づける最も大切な基礎となるものなのです。ところが、最近の子どもたちは、生活体験はもちろん遊びとか、人とのコミュニケーションといった大事な体験が大きく欠けてきています。例えば、北九州市教育委員会の調査（2000年）によると、昨日学校から帰って友達と「ぜんぜん遊んでいない」という子が5年生で54.4%もいます。これでは人間関係能力も自主性も体力も育ちません。精神衛生も悪くなります。

そこで、福岡県ではアンビシャスな子ども達を育むために、睡眠を適性化し、生活リズムを整える試みや、遊びを活性化するアンビ

シャス広場の活動など様々な取り組みを各地で展開しています。

しかし、どんなに人々が頑張っても一つの活動だけでは成果に限界があります。それは、子どもは一つの体験で育っているわけではないからです。ここに地域の人々が協力・連携して子どもたちが多様な体験のできる環境にしていく必要性があります。このための取り組みが（*）「地域連携事業」です。

ともすると、子どものことは学校に任せがちになる時代ですが、子どもは学校だけで育っているわけではありません。地域や家庭も大事な体験の場です。三者連携して子どもたちの育ちに必要な体験が十分できるようにしたいものです。

*「地域連携事業の概要」は52ページを参照下さい。

